

222
464

空 武藏

松平
玉之丞
傳

東
山
岡
村

	1
函	12 第
架	1 第
號	62 第



序

現在を論ずるも、

未來を語るも、過去を談ずるも、

社

會の出來事は、

執れか走馬燈の如くにして、

浮世は廻

り持なりといふも、

強ち過言に非ざる可し、

去れば

古きを温めて新しきを

知るとし云へば、

我小説の如き

も、尤も之に伴ふの傾

あるものありと云はん、

一管の

筆一葉の紙、寫すところ

の森羅万象は、

斯界の範圍

に包括せられざるあ

く、日常の情話より、

學理の濶奥

に至るまで、時勢の變遷

と共に、更に一軌道を往復

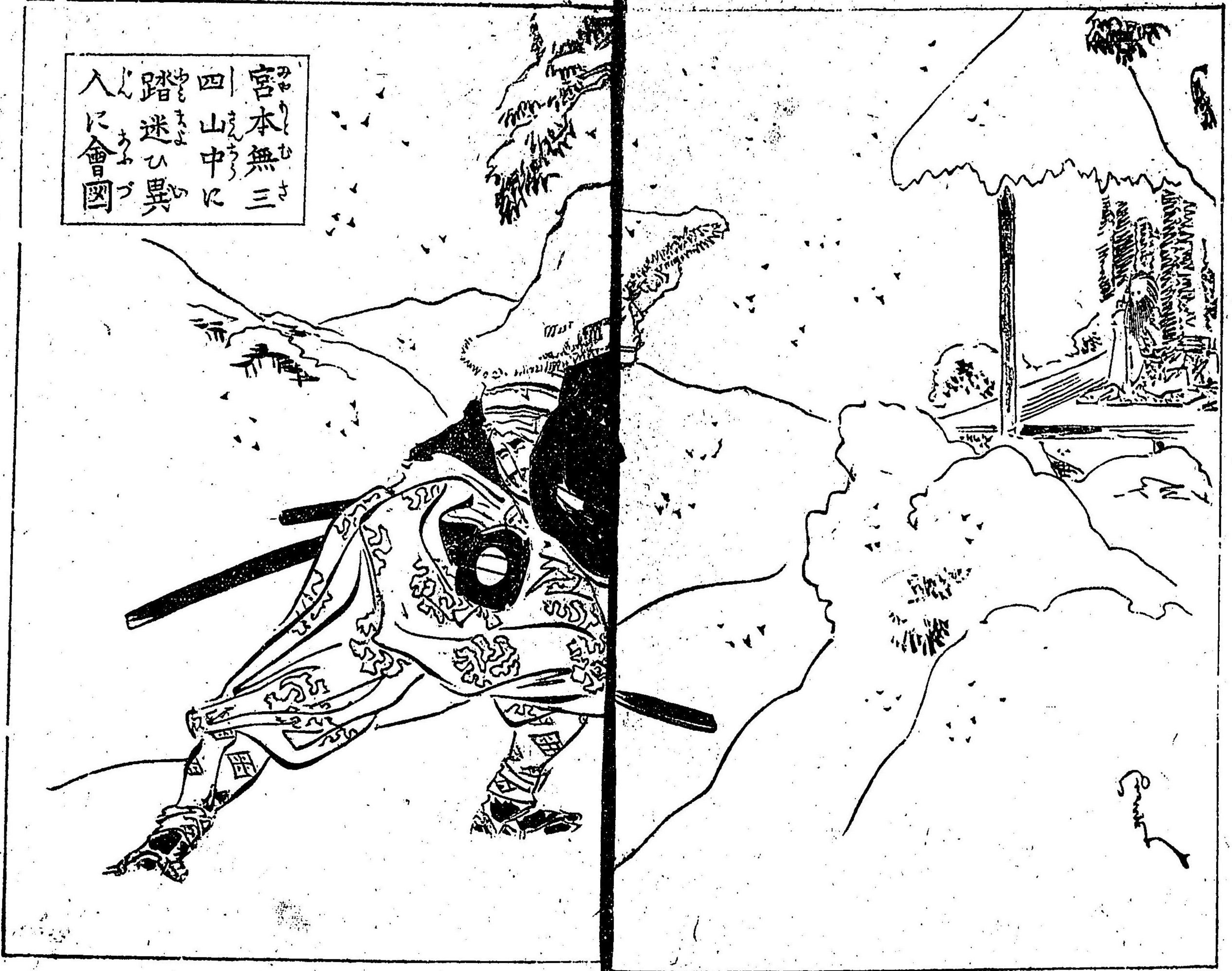
する如き

以上は、何れを論せず、

材料の無盡藏を有する如き



宮本無三
四山中に
踏迷ひ異
人に會つ



Emaki

特11
794

五 討 仇 島 灘 本 宮

宮本灘嶋仇討

第一 席

桃流舎至孝口演

此度講演いたしますのは宮本武藏灘嶋の仇討で渉座いまし
て仇討の中では随分有名な物で渉座いますか存じの通り宮本
と云ふ人は二刀流の達人でありますか敵の相手も佐々木岸柳と
やしまして燕返しの一流を起したる如き剛勇無二の者で渉座い
ますから中々二人の勝負に於ても面白ふ渉座いますか此二人は
如何にして斯く迄剣道を究めたか云へば武藏の父は吉岡無二
齋とやしまして文武両道に達したるもので吉岡流の開祖で渉座
たますかモ一年を老つたからといふので播州姫路の片邊りに柴
の庵を結んで住居致して居りました然るに此無二齋に二人の子か

ものにあらざるおけんや、今や、仇討小説の上梓を告
ぐ、過去の情態を知らしめ、彼の復讐を忠孝の美事と
して、上下の間に尊はしむるの、古へを忍はしむれば、
今將た引証して、勸善懲惡の一助とあらん、走馬燈あ
る哉。

江東隱士
天野彩霞識

ありまして長男を清三郎といひ次を七之助と申します此二人の子供を掌の裡の珠と慈しみ育て、居ります内清三郎は誠温和過ぎる位で弟の七之助は悪戯者といふ評判で汚座います。去宮本武藏と云つて古を擧げましたのは此七之助で汚座います。去れば悪戯をするよりしても自然と他の子供とは異つて居りました。劍道の方へ身を入れます未だ四ツ五ツの頑者とい時分から致して父さま坊は大きくあると日本一になるよ坊は屹度日本一にあつて見せるよと口癖にやして居りましたから父の無二齋も夫では何を以て日本一になるのだと尋ねた事がありました。ソウするど、イエ外でも無いのですよ。劍術遣ひにあつて名を擧げ日本一にあるのと全然二十歳近所の人のいふよう事を云つて居りますから無二齋も是こそ未頼母敷い者だと劍術を教えますにも只管身を入れて稽古をいたして遣りました。丁度十二歳の時で汚座

いまして父無二齋は運動の爲先と庭前へ出まして松の木への懸け手裏劍を打つて居ります。如何ある機會で汚座いましたか。百發百中といふ手練でさへも手裏劍が一本的を外れました。ソウするど後ろの方で誰かクス／＼笑つて居るものが汚座います。思つて無二齋先生ヒヨツと後ろを振り返つて見ます。と悴の七之助で汚座います。から憎い奴だと思つて叱言をやしました。然る處が七之助も父上だとやして負けて居りません。「イエお父さま夫は貴父の未熟とやすもので汚座いまして私の笑つたのがサラサラ無理でも汚座います。ま吉岡流の名人とも云はれる方が手裏劍一本打ち外すといふのは扱々笑に堪へたお手の内で汚座います。とイヤハヤ子供とも思へない悪口だか嘲駢だか大氣焔を吐きました。處此一言がグツと無二齋の癪に障つたと見へて立腹の余り腰ある一刀を引き抜き「己れ七之助不禮の一言子なりとて

容赦は致さん予とエイツと切り付けました七之助も心得たりと
ヒラリと体を換はすと見ゆましたが無二齋の後ろに立ち上つた
から「悴奴覺悟しろと再び刀を取り直して切り付けた處丸で飛
鳥の如き働きにて前にあるかと思へば後ろに隠れ其早業といふ
ものは天狗の再来かとも思はれる位いそこで無二齋も大に驚い
て我子ながら中々之は手に余す奴だと刀を鞘に納めまして恐ろ
に七之助の不心得を教訓いたしましたか實は無二齋か真劍をも
つて七之助の腕前を試しましたので座います

第二席

斯の如く七之助は十二歳の子供にも似合はしからず劍道は大に
進んで居りましたが如何に武道にばかり老けて居りましたから
と申しましても文事に心を委ねませんければ人間の片輪が出来
上つたようあもので所謂暴虎馮河の勇に耽ります夫れ故無二齋

も野村香勝寺の住職とは元々親類縁さになつて居ります事でも
座いますから此れ又頼んで七之助に學問の修業をいたさせまし
た處一を聞いて十を悟る處の人物では座いますから學問に懸けて
も中々外の子供等とは雲泥の相違で座いますお咄し變つて此
播州姫路の家中に劍法の指南を致して居りました有馬喜平治と
いふものが座いましたければ此先生腕は余り達者であら御し
中々の山師と見ゆました玄關構へも立派でありますしお負けに
道場の表へ日下開山劍法の開祖と立派に書いて座いました尤
も昔しは皆看板を掲げましたもので人呼んで金看板杯と申しま
した或日吉岡の悴七之助は用事あつて此處を通り懸りますと此
看板が目についたが何と思つたか突然墨汁の墨を筆に含ませ井
の中の蛙大海を知らず筆者野村香勝寺内吉岡七之助當年十五才
と書きまして其處を立ち去りました之を見たる往來の者は金石

板へ何か墨々ど書いて有りませすのを見て不思議をうにがや
と申して居りました門弟共も余り往來の騒々敷のに立出て見ま
すれば只今の始末故早速師匠へ此事を咄しましたから有馬喜平
治は驚き入るばかり併し小量な人に見へまして忽ちかつと怒り
を發し「ヨシ」憎い小海童イテ首骨を引き抜いて呉れようど
夫から門弟を引き連れ住職に逢つて此の始終を詳しく談じ小倅
とは云ひ赤がら恥辱を與へし上からは容赦は出来んによつて
尋常に勝負を致すから是非引き渡して貰ひたいと手詰の談判で
珍座います住職も自分の弟子が悪いので珍座いますから平身低
頭して詫び入りましたけれど扱人といふものは妙妙物で下から
出れば附け上りたがる物夫れ故喜平治は益々圖に乗つて高聲に
住職を詰り是非共召し連れて參らねば此處を立ち去らんと迄に
申された夫れ故無誠住職は七之助に此事を咄し升と驚くかと思

ひの外平氣なもので「お師匠様何も其様に驚き遊ばすには及び
ません是から有馬の道場へ參りまして尋常に勝負いたそうと思
ひまする……香勝寺も呆れて仕舞いませした儘か十五才の小童が
此大言を吐きましたので珍座いますから……夫より仕度致し
て住職は七之助を召し連れ喜平治と共に有馬の道場へ參りまし
たイヤ勝負となつて見ると案外千萬有馬喜平治も啮り兼ねたる
手練の早業あれば卑怯にも太刀をスラリツと引きぬいて立合ひ
ます此方は手頃の木劍一振り例へは鷹に逢ひたる小雀の如き有
様で珍座います腕前に於てはナカカ左様では珍座いません
七之助はエイヤツと云ふ氣合を入れて喜平治の手許へ這入ると
見へまするや否や突然喜平治の右の二の腕をエイと打つ喜平治
は南無三と後へ退るうといたすを再び木劍を取り直して打ち込
みませした處何ぞ堪らん喜平治の脇骨は碎けて仰向け様に其處へ

倒れましたが一打で以て息絶へたるの始末アソウ致すと門弟
等は師匠の敵と一同刀を抜いて七之助に切り懸るを右に換し左
りに避け香勝寺を肩に懸けるかと思ふ間に章駄天走りに外へ飛
び出ししました門人達は「ソレ遊すあと後ろから息をもつかず
追懸けて来ると折よく向うより供廻りも美々敷く槍を一筋立
てさせましたる武夫が参りました故七之助は九死に一生を得た
の思ひにて此侍の籠脇へ参り言葉短かに前々からの次第を咄し
師匠ある香勝寺の住職を是非預りを願ひたい私しは是より追
ひ来る門人等と一勝負いたして目に物見せて呉れますからと意
氣込強く走り出でんとするを彼の侍は暫時と呼び留めて「勇に
逸るは匹夫の業何事も拙者にお任せあさいと夫から大勢の追ひ
来るを待ち構へて居る處へ急ぐ門人等来りまして理不盡を言ひ
出しますするの件りは次席に詳しく辨じます

第三席

如何に有馬の門弟とやら尋ねの童兒と一人の僧は成程此邊
りを通つたかも知れんが駕籠には乗つて居るし少しも氣に注ん
事だつたから此先さくでも尋ねては如何であると言葉温和か
に申し述べましたから門弟等は益々氣を焦たつて既に此武士の
駕籠に迄狼籍を致さんと致しましたゆへ武士はモ一承知しませ
ん「ヤア無禮では座さう各々方斯く迄やして猶お疑がいがば
座れば斯くす手前が相手を致さう手前事は肥後國熊本の城主
加藤肥後の守清正の家來宮本武左衛門とすもの……門弟等も熊
無きに於ては伊立合ひ致そうと大音に呼ばりました門弟等も熊
本の宮本武左衛門と聞いて一人去り二人逃げ執れもちりば
らばらに成ましたといふは兼て武雄の程を承知して居るからで
伊座いますすが七之助も住職も伊座を以て再生の思ひを致しまし

た併し香勝寺に於ては吉岡無二齋に對して打ち捨て置く譯には行
きませんから此咄しを致す又宮本に於ても吉岡の倅と聞いて無
二齋とは兼て全門の好身もあればと吉岡方へ訪れられた無二齋
は此の咄を聞いて大に驚き以後の懲しめの爲め七之助は勘當致
す事と相成りましたたを宮本武左衛門は聞いて親の倅氣象左も
ある事では倅坐れと茲に一ツの倅相談があるが夫は外でも倅座
らん拙者不幸にして未だ子供を儲けず日夜夫れのみ苦勞致して
居りましたが今七之助殿の容良を見るになか／＼凡人ならぬ有
様就ては倅勘當と迄の倅言葉で倅座れば改めて拙者の養子に下
さる譯には参りませぬかと吉岡無二齋に頼み込みました無二齋
も勘當するとはやたよくな物の惜むべき倅で倅座いますから中
々一人の量見では決め兼ねるソコで倅七之助に尋ねます是非宮
本の許へ養子に行きたいといふ事ですから夫處で咄も纏まり武

左衛門と全道いたして熊本へと歸りましたされば此七之助が宮
本の姓を名乗りましたも實は斯ういふ次第から致して宮本武藏
とやすやうにありましたので倅座います夫から武藏は養父武左
衛門と共に肥後の熊本に下り日夜文武の道に身を委ねましたが
武左衛門も日本屈指の劍法の達人で倅座いますから既に父無二
齋より奥儀迄も學び得たる宮本武藏に於ては益々腕の上達する
ばかりで倅座います後二刀流の開祖といはれるようになりま
したも一刀は父無二齋の流儀を執り一刀は養父武左衛門の流儀
を執りましたのだらうで倅座います先づ是れ迄は宮本武藏の生
長で倅座いまして是れより暫らく佐々木岸柳の倅咄に移りま
すが此岸柳も元は系圖正しきもので倅座いまして近江の守護職
佐々木六角入道承頼の落胤で倅座います幼名を久三郎と申しま
して幼き時より至つて利發な者で倅座いますければ六角亡びて

後には流れ出て羽國最上の在所に臨住所をいたし細き煙りを
立て、居りますすが其内に母は世を去り今は已れ一人になりまし
た中々腕力のある童で座いますれば晝は山へ行いて薪を取り
夜は岩の根或は大樹杯を打ち敲いて只管武術の稽古に油断は涉
座いませんでしたか時は彌生の半ば過ぎで座いますして山々に
ある櫻は爛熳と咲き満ち花見の人々は引きも切らぬ有様で座
います其頃出羽守義房公の藩中に知行三百石を頂いて居る劍法
の師範野田大膳と云ふ者が座いますしてたが今日しも門弟數百
人を引き連れて花見の宴を千歳山の麓に開き主従無禮憚といふ
ので非常な騒ぎで座いました大膳も大に興に入りましていよ
夕暮の鐘を相圖に東西に別れようとする時乳母が油断か致
して大膳の一子豊丸が麓の裾を流れる長狭川の急流に送り落ち
ました乳母は狂氣の如くに流に添ふて追ひ行きますし大膳も後

いて逃げ出しましたかモ一小時も流されままた事故に川上の
人に助を乞ふの外は座いません此時一人の小僧が突然川へ飛
込みまして扱手を切つて遊ぎます故那れは何處の小僧だらうと
思つて居る内に忽ち一町あまりも泳ぎまして豊丸殿を扶け上げ
ました野田大膳も其處へ來り「如何にも其方は感心な物だが姓
名は何と申すと尋ねました

第四席

之は大先生で在らつしやいますか私は浮城下を離れまする在に
住んで居る住々木久三郎と申すもので座います「ア、左様か
併し只今は此急流へ飛び込んで我子を扶け呉れたが如何にも喜
ばしき事だ……其時其方の堤の上より川へ飛込む時にエイッど
いふ掛聲をして飛込んだが總て掛聲は身又答へた處があければ
あらぬ物だし又水練も實に達者な者が誰から學ばれたのか詳

しく素生等も語つて聞かして貰ひたいと情けある尋ねに久三郎は是迄の次第を殘らず咄しまして今は山家の一人住ひだといふ事も申し述べましたから夫こで我家へ連れ行きまして劍術杯も教ねて見ますると熱心ある上に氣象が勝つて居りますから忽ちの内よ上達を致しまして門弟中の首座をメますようになりました處が頼みに思ひましたる處の師匠大膳も此頃不圖風邪の心地と打ち臥しましたるに夫が病の本となりまして終に歸らぬ旅路へ赴かれしました其時大膳は久三郎を枕邊へ呼びまして悴豊丸の事を頼み何分若年の事故後見として門人共をも引き立て、呉れるようにどの事で傍座いたしましたが定業なれば是非も泣々野邊の送り濟ませ夫から上へも願ひを上げまして首尾克く豊丸に家督相続の許しも賜はり久三郎は其處で後見といふ事になつて道場を引き受けて居りましたけれども誰しも其頭の押人のある

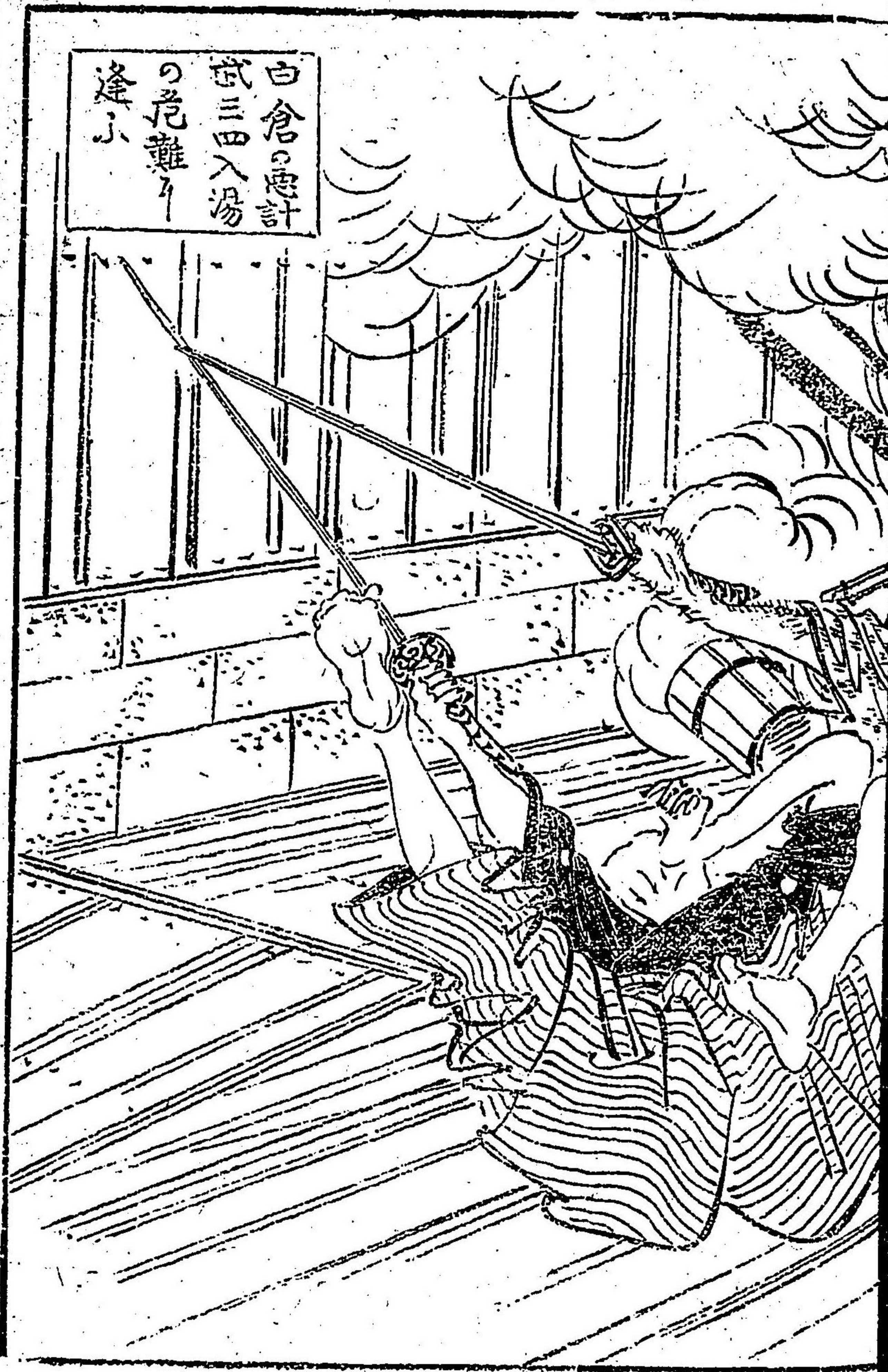
内は能う傍座いすが押人の無くあると直に増長し易いもの左れば久三郎も始の内ころ謙遜でもあり謙直でもあり致しましたたがハヤ此頃にありましたは酒を呑みあそび至した幼主豊丸をも主人と思はぬよう有様其上門弟等に對しても少しも深切といふ事もなく己は六角の血筋杯と意張り散らすような譯で傍座いまずから一人去り二人退き門弟も次第に減つて参りまして昔し盛つた道場も今は竹刀の音さへ致さぬ様か次第に相成りまして傍座いまず然るに此頃久三郎は品行こそ斯の通り至て悪くありませんましたけれど武術に於ては益々上達致し柳の枝を相手にして一流の奥儀を極め終に岸柳と迄名を改むるに至りました併し道場は此の通り寂寞として参つた爲めにハヤ此地に居悪く相成つて参りました故で傍座いまずか或日大膳の未亡人并に幼主豊丸殿の前へ出まして永らくの間世話にありし禮を述べ夫から劍

道修の爲めに廻國致しとう座れば修暇を下さるようにとい
つて此家を立ち出でましたければ結局野田家に取つては
厄拂ひでも致した如く喜こんで居りました

第五席

佐々木岸柳は夫より廻國修行いたし已れの腕前を試して居りま
したか或時の事海岸に立つて波音の岩に當るの様を見まして一
流を編み出したもので是れを岩石砕きとも燕返しともいひます
が例へて言へば此手の奥義ころ柔克く剛を制すと云ふのが秘傳
として修座います燕の風を切つて空中を飛ぶや至て速かにして
弓取の名人も時に一矢を誤たざるを得ずとの次第其れに考へを
疑らして工夫した一種の秘術で修座います實に岸柳程名譽の達
人で居るから高慢な氣風があつたあら人にも尊敬せられて後
世にも美名を傳へられた人で修座いますようが惜しい事では座

います夫から至る處の道場にて手合せを致したが己れの上に
立つものはなくして益々高慢の鼻は高くなる斗り終に悪い風習
に染つて道場破り杯といふ行もありまして人毎に忌み嫌はれま
する始末で修座います夫れ故折角の腕前を以て居ても仕官する
事も出来ず熱れへ行つても評判が宜敷ないソコで其頃攝州有馬
の温泉とやすのが修座いますして何れも歴々の方々が修出にあり
ます處で修座いますから斯ういふ處へ往つて武術の手練を願は
またら又推舉して呉れる人もあるたろうとコいふ考へを起
しブラリと有馬の温泉までやつて参りました然るに其頃吉
岡無二齋に於ては當時攝州廣島の太守毛利輝元公に抱へられ知
行八百石を賜はつて居りまして何不自由なく暮して居りました
が古しの古疵杯の傷むといふのは克くある習ひで今は六十の上
を越したる高齡で修座いますから折々之れが出ます夫れ故有馬



の温泉に入浴したらよからうといふので養生の爲め家來一人
を召し連れられたまふ當時は此處に氣を養つて居りましたが此位の
名譽の達人たる無二齋の事で侈座いますから歴々の旁も態々
は訪ねに相成り武術の侈咄し杯も侈座いまして只今有馬の温泉
では幾等武者修行杯の名人が來ても無二齋の外に人なき如くに
尊敬して相手にする者もない位で侈座います夫處へ遣つて來た
る佐々木岸柳で侈座いますから折角の望みも水の泡ですッ
ウあると自分の身の未熟は思はないで只管吉岡無二齋を恨みる
ようになる思へば人といふものは實に得手勝手なもので侈座い
ますが何卒して無二齋と立合ひをした上充分彼れを取り替いで
遣つて夫から自分の名譽をも揚げたから自然と仕官の目的も遂
げらるゝだらうといふ實に殘渺な考へ方して吉岡無二齋又勝負
いたさん事をす込ひの一席例によつて次にす述べましよう

第 六 席

岸柳は強て無二齋に面會を求めまして是非勝負も致そうといふ
次第で侈座いしましたが無二齋は強つて断はりました果は馬鹿
睨いたすの口氣で侈座います故無二齋も流石堪忍袋の緒が切れ
ましたもの見えて「然らばお相手致そうと馳て宿屋の廣庭へ
出ましたらか見物一全も片唾を呑んで扣へて居る其折岸柳は太
き木刀を持ち常よりか三倍もあるものを取り揚げてサア來い來
れと身構へを致す此方は無二齋短き木刀之は至て秘藏さ木刀で
侈座います其上岸柳は血氣盛んな大兵の男無二齋は腰も梓の弓
となりし老人で座いますから見物人は孰れも老人を危んで居
ります併しソコハ武術の一点勝負は見懸けに寄らぬもので侈座
いますから無二齋老人も木刀を取り直すや否や二重に折れし腰
も忽ちに伸びましたサア折らあつて見ると孰れも驚きましたか

五十二 討 仇 島 灘 本 宮

し物影よりして突然繰り出す槍先きを体を換したる折しも又一
人飛出して来て切り込んだるは是れ予正しく佐々木岸柳と夜目
にも確かに見ぬました「老老覺悟しろ有馬で不覺を取つた爲め
何れへ往つても仕官か出来ぬは取も直さず汝のお陰だぞア尋
常に勝負しろと切り付けましたが敵は二人と思ひの外後ろより
二間余の槍を以て聲をも懸けずに無二齋を突き通しました其れ
が爲め終に其場に切り倒されましたけれども折りふし彼方より
人の足音の聞ぬます爲めに止めも差さずに岸柳等は其儘逃げ
仕舞ひました……通り懸ましたはた吉岡の近所の者で彦座いまし
たから早速此事を知らせると悴清三郎は追取刀で飛で参り父上
れと呼びますと敵は佐々木岸柳だといふ事が分りましたな
れと其儘息は絶へまして彦座います其事上へも彦届けに及び野
邊の送りも済ませまして熊本ある宮本武左衛門の許へも知らせ

四十二 討 仇 島 灘 本 宮

其内にヤツと云ふ懸聲と共に打ち込んだる一刀を引ッ外したる
無二齋が返す一刀を岸柳軽く受けて裾を拂つたのが燕返し秘
術で彦座いましてたけれとトモ無二齋に逢つては及びません
いと云ふ氣合と共に俄然と岸柳の肩のあたりを發止と打つ何ぞ
堪らん岸柳もヒョロヒョロと跡を退るを附入つて利腕を打ちまし
たから岸柳は終に見苦しき負を取りました見物一同はワツ
と云ふ騒ぎ岸柳はソコソコにして其場を逃げ出し無二齋も其翌
日國から悴清三郎の病氣の次第を報知がありました爲是亦國へ
歸りました無二齋も悴の病氣を案じて歸つて見た處幸ひにも快
方に赴きまして彦座います其れ故門人中にて無二齋の歸國祝と
して一日酒宴を開いて招かれました處余り飲まぬ酒も門弟等が
交るゝ勤めました爲め大に酩酊して立ち歸りましたはハヤ夜
も更けし頃で彦座います一人諸杯を論ふて歸ると誰かは知ち

て遣りいよく武藏仇討の爲めに發足いたしませす事に定まら

第七席

宮本武藏は當時は加藤肥後の守の侍家來で侍座いますから如何に實文の爲めとは言ひ乍ら他藩の人の爲めに決して仇討の免許は成りません事で侍座います夫れ故只管武左衛門も心配いたし

討にでも相成つては成らんとどの侍考へよりして此様も次第になりましたので侍座います又藏も古今無双の勇士武藏は二刀流の開祖とも云はれる位も劍客で侍座いますから両勇士の勝負時

第八席

も述べ盡せない位で、汐座います。が道中にて名代の汐咄し一二を
 は聞きに入れました。して後灘島仇討の咄しに移りました。よう
 本來で汐座いますれば、吉岡無二齋の長息清三郎が仇討の爲めに
 發足いたしまして他家へ養子に参つた武藏は二の次では汐座い
 ます。ようあもの、清三郎は如何にも虚弱な性質で汐座いまして
 其上劍道も至つて鈍く汐座います。から順當は欠けても弟武藏に
 頼みました。したるようあ始末で汐座います。扱武藏は追々上方筋へ進
 り、て参りました。して夫から大坂京都と敵の在家を尋ね廻ると雖
 肖たと思ふ人もなく其日々々と送り東海道を下つて参りました。
 此處は名代の箱根山八里の時……只今では旅をなさるにも實に
 樂あもので、瀛車の窓から首を出してアレが箱根山かウム一箱根
 から此方は化物が出ねーといふが夫れじやア那處が化物の店印

しだな……あんて咄しをして通られる實に有難い大汐代で汐座
 います。が昔しは難所の一ツで汐座います。大石小石がごろし
 て居て一町往つてはやすみ二町往つては息を吐き杖に纏つて歩
 行ので汐座います……併しマサカ此様塩梅じやア到底も一日に
 越す事も出来ずまいが武藏は丁度只今でやす三時頃に箱根の
 麓まで参りました。して或る茶屋へ休みました。「お客様へ是から山を
 お越しで汐座いましょうがモ一貴下此宿で泊り遊ばす方が宜
 敷う汐座います。よ夜になります。と悪者も出ます。様子です。し夫れ
 に誠に當節は狼が澤山居ります。ので汐座います。から……宮本武
 藏は夫ころ却て愉快の事を例令盗賊何人居るうとも夫事恐
 る、武藏ではさいといつて山を昇つて参ります。と其あとから來
 たのが柔術取りの關口彌太郎で汐座います。が全しく此茶店へ腰
 を懸けまして休みました。した處茶屋の婆さんの云ふには「今お若い

の狼を相手にして必死の働で傍座います「ヤア是れは珍らしい
 程狼が居るものだが丸で狼隊の二中队程もあるわいと段々傍
 へ参ると狼も是りやアまた助太刀が来たなど「と吠へるとサ
 ッと半分許りは關口彌太郎に飛び懸りましたが其早業は丸で兵
 隊の訓練のようなものです「サアはお出たナ、狼殿イザ見参と許
 りに身構へたは柔術の秘術後に關口流の開祖と云はた人で傍座
 いますから實に之は面白い勝負天下の英雄が二人寄つて狼と必
 死の勝負をするんですから仲々大變な次第……前に来る奴は撲
 殺し後ろから来る奴は蹴殺し瞬く間に狼の死骸は山を築きまし
 たが宮本武藏は一中隊丈けは跡から来た旅人の方へ行つた爲め
 に戦ひも至つて樂になり難さく切拂つて仕舞ひをして不圖後ろを
 見せると未だく跡の一中隊は勢ひ盛んに飛懸つて居る姿を
 見て取る宮本助太刀致さんと致すを彌太郎は聲を懸け暫しと留

お侍さんがお止めやのも聞かずに山をお越しにありませたけれ
 ど大方今夜は追討さか狼の爲めに命は傍座いますまいと話し
 す夫を聞いた彌太郎は夫りやア面白い侍もあるものだ夫じやア
 是から身共が参つて見届けて遣はさう「旦那様貴下も亦お越し
 で傍座い升か夫ころお危う傍座いますから老嫗のやす事も少し
 はお聞きなすつて是非今晚は此宿へお泊りが宜しう傍座い升
 「イヤ、決して心配するな拙者は少しは心得のあるものだ「夫
 れじやアモ、どうから傍座存ぞて傍座いますか「マア何でも宜し
 い……茶代は置いたふと夫れからスタ、走つて爪先さ上りの
 籠から追々難所へ懸りましたのは夜も初更を告る頃では座いま
 すスルト遙か彼方の方に當つて頻りに狼の友を呼ぶ聲が聞えま
 すから扱は彼の婆の言葉に違はず狼奴が嗅ぎ付けたと覺えたり
 何程の事あらんやと追々遣つて参ると己に一人の侍が百匹余り

めて携えず去らずトツは是れも一中隊の狼を追ひ拂ひました
が差して勢れた様子も見なせんと二人の勇士各々手並の程は分
りましたから其處で名乗り合つて見れば一人は二刀流の開祖一
人は關口流の達人………劍術遣ひと柔術取りが寄り合つたんだか
ら面白のお互にコレハと斗り奇遇を喜びましたが豫て宮本
は敵持つ身の上で傍座いますから自づと様子も變つて居ります
夫と察した彌太郎はどうより吉岡無二齋が横死の事も承知して
居りますから「コイツは宮本武藏は武者修行とは云ふもの、敵
の様子を探るには遠ひあい併し今の腕前では伸々確かなものだ
が萬一敵に逢つて武術の及ばん時は返り討ちになるは必定だか
ら一番余計なお世話だが腕試しをして見てやろうと義心に富ん
だ關口彌太郎「宮本氏只今は傍苦勞千萬な儀で嘸お勞れも傍座
ろうが傍目に懸つたのが幸ひ何も修行の一ツで傍座れば明月を

第九席

幸ひに傍立合ひを願ひたいもので傍座いますと勝負を挑まれま
した
敵に呼び留められて背ろを見せるは勇士の恥づる處況して宮本
武藏は武者修行を表にいたして居る者故何の違背あらん直ちに
準備に取り懸らんと致しましたが別に木刀も何もは座いません
から其處等にある木の枝を折つて大小の形取いたし之を携へて
勝負を争ふ此方は彌太郎柔術取りですから引段武藏程の手數も
懸りませんが双方位ひ取りも極りましたる有様は猛虎の餌食を
争ふの有様互に隙を窺つて居ります武藏は隙や見出しけん長
刀を以て打込んで參るを颯と換した彌太郎の姿は見なせんか
ら武藏も不思議に思つて居る處へ「宮本氏」と聲がいたしま
すゆへ克く見ますと松の大木がありまます其枝へ腰を懸けて

居りましたから驚きましたのは宮本武蔵「成程武蔵の上には上
のあるものだと只管感心致しましたのは是の飛上る流儀を知つて
居つたならば敵を討つにも一ツの方便と是からコレ」の次第
と仇討の事をも咄して奥儀を傳へられたのが天狗飛切り流
とすので座います武蔵は是を會得して夫から伊豆に下りま
したが多存じも多座いましてようか此處には一刀流の開祖伊東一
刀齋とす者が多座いました故如何にもして此人に就て劍法の
奥儀をも極めたいと思ふて漸く一刀齋の庵へ参りました素より
人里離れた處の地で多座いまして隠遁者の事ですから庵といへ
ども雨露を凌ぐのみの事では座います夫から段々武術の咄しを
して是非に一手の多教導に預りたいと云ふ事を申しましたが夫
ではといつて直ぐに勝負杯は致さない飽まで辞退して居つて容
易の事では應じまい果ては伊りの傍でもつて居眠りを始めまし

たので宮本武蔵も心中には大に怒りました「コノ老嫗奴俺が志
れ程言葉を卑ふし禮を厚ふして頼むけれども勝負どころか居眠
りを始めるとは不禮至極の至りなりと突然二振の木刀を取るよ
り速く一刀齋に打つて懸りましたが老人は只一討に討ち据わら
るゝかと思ひの外傍へにあつたる銅蓋を以て發尖と斗りに受け
ました今迄は實にシヨボクした老翁と思ひしに武蔵に懸けて
は忽ち血氣の壯年を欺く勢ひ武蔵は焦慮で打込うせいたしまし
たけれど一刀齋の体は銅蓋に隠れて仕舞つて打ち込む事が出来
ない只睨んで斗り居るので多座います然る處がエイツと叫んだ
一刀齋の掛け聲に武蔵は百雷に打たれたる如く總体しびれ渡つ
て其處へ倒れて仕舞ひました此時一人の童が薪を背負つて歸つ
て参りました處不相變老人は居眠りをいたして居りまして傍に
一人の旅人が倒れて居ります故介抱いたらうと思ひますを一刀

齋は之を制し「其内には氣が注ぐだろうから、ア其儘にして置
くがいらすと云はれたが果して其通り一時余りにして武藏も正氣
に戻り只今の不禮を詫言て茲に合氣の一術を授らるゝ……愈々武
藏も多年の辛苦其甲斐があつて東北筋より取つて返し再び九州
路を探ねます際豊前の小倉に於て圖らずも敵の岸柳に逢ひま
する灘嶋仇討の一席……

第十席

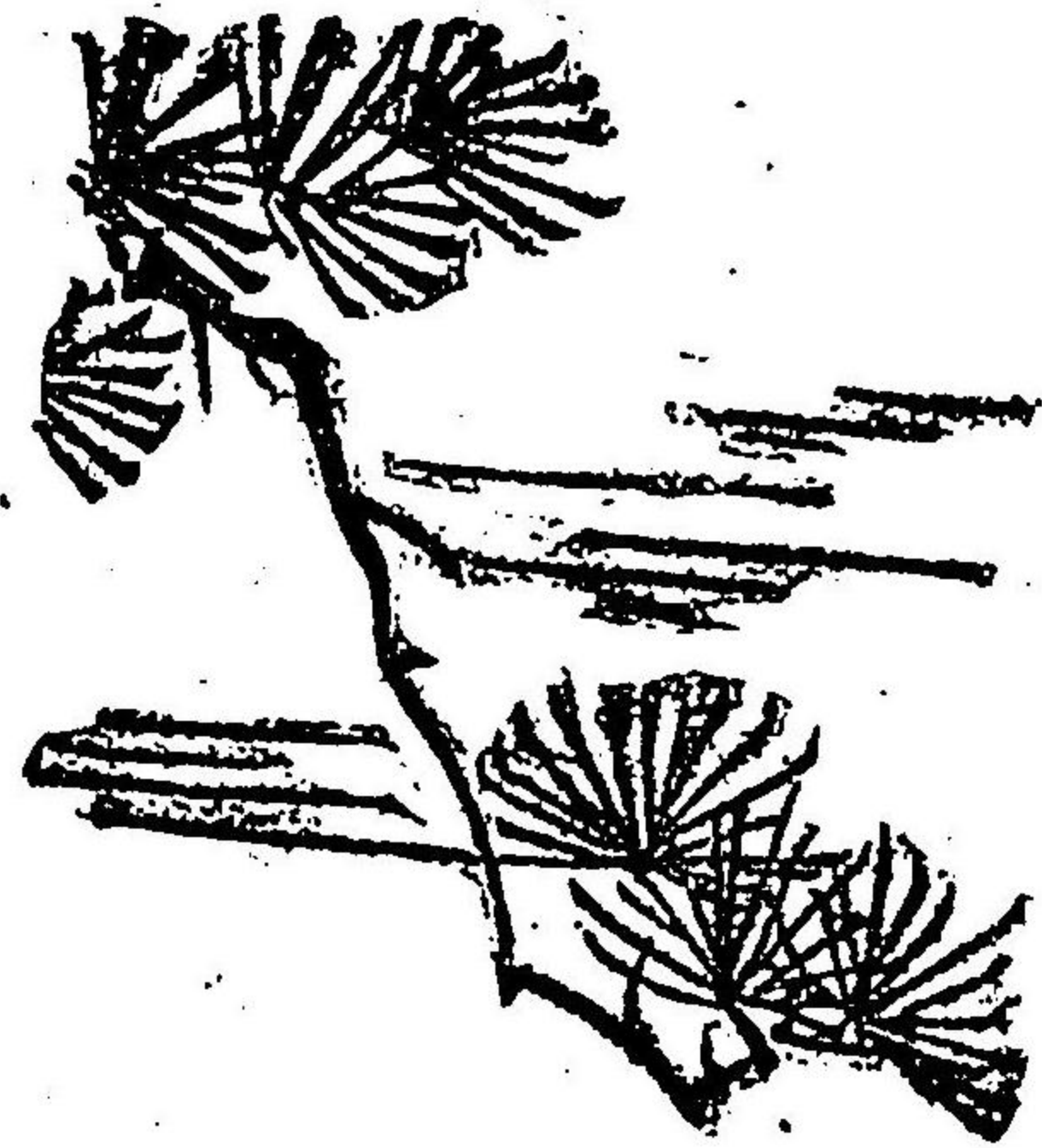
豊前の小倉に於て町道場を開いたる武藏者に佐々木勘太夫とヤ
すものが渉座います此事を傳へ聞きまして宮本武藏は態々尋
ねて参ると全くまごう方なき仇の岸柳に相違ございせんから
先年播州路に於て盗難を助けて遣つた巴屋五郎兵衛といふ者の
方へ宿を取り所の太守黒田甲斐守様に仇討の願ひを上げました
然る處毛利公より豫て内々の渉顧みもありし事とて早速お聞き

届けに相成られ勘太夫の岸柳をば取り逃さぬようにと警衛の役
人を附けて置かれました其仇討の場所に就ては種々評議を凝
しましたが高岸柳の門弟にて卑怯にも助太刀杯いたすものが
あつては宮本の体に傷を附けまいとも限らない夫では寧ろ彼の
灘嶋へ上陸さして船にて周圍を取巻き他人を揚げさせずに立合
はしたらよからうといふ事に極り明日は愈々年來の本意を達す
る日となりました武藏の喜びは一方あらず夜の明るを待つて宮
本武藏は巴屋五郎兵衛に渉目附け二人足輕六人と共に船に乗つ
て向ふへ艘ぎ付け彼方の岸柳も渉目附三人と足輕十六人に護衛
せられて上陸いたす四方は丸で立錐の地もなき程の數万の見物
で座います此時宮本武藏は船の擡を以て立向つたようにも
中そ者が渉座いますサカ双方達人の眞劍勝負であつて見れ
ば夫ば根もなき事と思ひます矢張り両刀を携へたもので渉座い

ましよら夫れから支度も出来たから双方名乗り合ひましたが一
離一合虚々實々前にあるかと思へば後ろにかくれ右に拂へば左
に換す手練の太刀先き双方果しが惨座いせんが武藏は過る日
一刀齋の庵に於て合氣の一術を授けましたから敵を勞らすには
之れに越したる事はないと孝子の一念エイヤツと云ふ掛け聲は
天地も震ふばかりの有様故岸柳も大に勢を生じました併しな
其位では必死の場合ですから切り込み事も出来せんチャ
ンと刃を合せるかと思ふと跡へ退り一進一退實に法よか
つて居りますすが如何なる隙や見出しけん武藏は長劔を以て切り
附けたるを岸柳はカツチと受け留めし間に短劔を以て眉間を望
んで打ち込みました岸柳程の達人で惨座いすが此一刀を受け
損じた爲めに血汐眼に入つて働さ自由あらず武藏は得たりと切
り込んだる時に飛鳥の如く裾を拂つたのは是れぞ秘術の燕返し

宮本灘島仇討終

の一刀で惨座いたしましたが運好く武藏は關口彌太郎より天狗飛切
りの術を授けられましたから飛び揚りさ再び切り附けたる一
刀は肩先深く袂懸けに切り入つたる故流石の岸柳も遂に其場
に倒れました武藏は充分十々目を刺し首尾克く仇を復しました
が若しも關口彌太郎より飛切りの一術を授けられなかつたら
ば両足は切り落されて仕舞ひ仇討を仕終せましても片輪者とは
ある處で惨座いたしましたが實に危険い事で惨座いたしました武藏は黒
田公の重役等にも厚く禮を述べ夫れから一先づ越州へ立寄り親
の追善をも立派にいたして熊本へ立歸りましたエ、永々惨退屈
サア……



序

古は忠孝の美事として仇討の事世に傳へられ君父の
仇には共々天を戴かすとの鏡石心を抱ては辛酸の街
も更に屈する處なくして今に其名を留えたるもの數
を知らず然りと雖世に隠れあきものを網羅して梓に
上せし物至て稀なるのみあらず既に明治の今日に至
つては禁止の令を發せられ絶て之を聞く事あかりき
依て求光閣のあるじ之等の物を聚えて昔の遺風を知
らし先殊に尙武の氣象を養成するの一助にも供せん
との思ひ出に陸續出版の榮を見んとす茲に於てか請



石井兵助
諸國遍歴
雙敵赤堀
祖不圖

龜山仇討

桃流會至孝口演

エー今回ば復讐美談の數多き中にも最も名高龜山仇討の縁談で
 んいます抑此仇討の發端とやまするは天和元年のとでんいます
 遠州濱松の城主青山下野守忠重の家中に石井右兵衛則安とて代
 を寄頭を勤むる譜代の士がういました老年のとでんいますして死
 角身体の勝れませんでしたので攝州有馬の温泉に保養に参り一浴樓に
 暫し逗留致して居ります中かゝる場所のととて浴客同志懇意
 に相成り互に名乗り合ふ様などがういます此處に於て圖らず
 も石井源之丞といふ壯年に出遇ひました同姓なるとより色々國
 所なとの話を致しましたが同じ家筋にて己れはるの宗家あると

はる、儘に禿筆を走せ江湖に紹介する事然り

炎熱の苦を忍びつゝ、
流汗衣を徹するの月

天野機節誌

六 龜山 仇討

も解り扱ては源藏殿の傍二男ありしかば尊父にも傍堅固なるや
杯と打解けて話し殊の他に頼もしく思ひます中右兵衛は熟く
源之丞の風体を見まするに天晴文武の名士ともあるべしと思は
る、壯年でふいますので何卒してかゝる者を我家督に致したし
と己の實子なき所より考へまして源之丞の家方の事を尋ねます
るに今は兄の六太夫親の跡目を継ぎ親は隠居なし居り私は未だ
部屋住なりとやすので右兵衛はいよゝ己の養子に貰ひ受けん
と思ひ定めましたたが此所にて直相談にも参りませんから距離遠
からぬ事でふります源之丞を同道にて播州明石へ参り石井源藏
に面會致し家督に貰ひ受けましたそこで右兵衛は持参あしたる
長谷部則長の刀を銀引出に遣し役一足先に濱松を指して歸國
致しました源藏は源之丞を側近く招き汝は幼くして母を失ひ父

七 龜山 仇討

親一人の手に育ちし故殊の外不憫に思ふのぢやが此度の談は得
がたき事にて宗家のもと云ひ五百石の俸祿なり願ふてもなき所
じや随分どもに君父に仕へて忠孝を屬ひべしそれに就てはと云
ひさし一段の聲を低くし汝には忍び妻ありて二人の子迄設けた
るとば我仄に聞き居るが汝にとりては妻子の別我が汝を離し遣
すも同じ情なれど大事を思はし必ずるれらに迷ふべからず汝の
子供は我爲の孫あれば必ず僥略にはあすまじ是を汝に取らす聞
母に預けて育すべえされども我知れりとは云ふべからず又汝
の名をも言出さすべからずと百兩を興へ情を別けたる言に源之
丞は返す言もあく百兩の金子を押し戴き妻子に別を告げ再會を期
して濱松の方へ出立致しましたのは天和元年の霜月のもでふい
ました

龜山仇討

様亭に石
井兵助一
處女に懸
想ききり
圖



此度の法事を聞き万松院の
住持によりて託をゆ入れま
した右兵衛は元來入情厚さ
人でムいますから水右衛門
の身の上を不憫に思はれ出
入を許すのみか己の宅に食
客とあし何吳とあく世話致
し置きました然るに諺に曰
ふ暑氣忘るれば陰忘るゝに
て何日しかに悪念起り我別
の條は皆我物争で源之丞に

八 龜山仇討

かくて源之丞は日あらずして濱松に着し石井一門名乗り合ひ養
子廣めも相濟みました然るに去年將軍綱吉公御代替につき伊祝
儀申上ぐる爲諸大名出府致す中に濱松の城主青山下野守も國
元より器量ある若侍を召されましたが源之丞其御撰びに相成り
ましたので一家中の稱美にあづかり右兵衛の安堵一方でムいませ
ん然るに石井家の先祖石井右衛門百年忌に當りますので萬松院
といふ寺にて法事を行ひましたが茲に藤田水右衛門といふ者が
ムいます此者はト元と云ふ醫者の梓でムいますト元は右兵衛の
妻の従弟でムいますので幼年より右兵衛の子あき儘に我子同然
に慈しみ行々心底を見貫し上は養子にあせんと思ひしもので己
の下屋敷に差置きましたのが身持放母に若者共を多く集り不行
跡の事がムいしましたので出入さへも止められたのでムいます

十 龜山 仇討 詩

渡すべき是と云ふ程の罪もあきに兎や角と罪をつけて追出しか
の源之丞の如き才力もなきものを養子となしたるは恨まれどこ
れより恩を仇になす發端とありましたかくて水右衛門は先年交
りし悪友等の資助を受け其頃名高き鞠谷圓四郎の許しを受け
りといふので劍術の道場を開きました右兵衛は又もや水右衛門
奴放埒を始めしよなど片腹痛く思ひ度々異見を加へ若年の身を
以て余事は兎も角も武術の師範は叶ふべからずといふに水右衛
門は某が腕前を存せしな故あらんなど高言を吐きますので
然らば某老年あがらゆ相手致さんと木刀を以て試合を致しまし
た水右衛門は恨に思ふ事故只一刀と向ひましたが右兵衛は一刀
流の達人でふいまして老練でふいます物の美事に打負かしまし
た此事誰言ふとなく一家中の評判となり鞠谷流の傳先生の名聲

龜山 仇討 一十

は忽ち地に落ちて仕舞ました
九日過ぐれど未だ盛なる菊畑黄金白金色を競ふ陶淵明の寝居も
かくや思はる九月中旬の庭景色に石井右兵衛は下り立ちまし
て飯山の彼方此方と徘徊致し居ります時今日しも十五日の禮に
とて藤田水右衛門が尋ね参りました勝手口にて様子を尋ね升れ
ば源之丞は他行のよし右兵衛は座敷にありとのとでふいますか
ら然らば一寸御儀やさんと座敷へ通りましたが右兵衛は見ぬ
ませんはて何處にと庭の方を見ますと飯山の彼方に余念もな
く眺め入る状態ですから折こを宜けれと莞爾打笑み長押
に掛けたる大身の槍を押し取り抜足さし足忍び寄り聲をも掛け
突きたる槍は胸へ突き抜き槍をも抜かず其儘押伏せ水右衛門は
勝手元へ参り下女下男に源之丞殿歸られさば宜敷頼むと暇を告

げて立歸りました其後此家に飼置きました小ましと名づけし猿
瀨りに悲しげに啼き叫び家來の文太夫といふもの、袖を引きま
すので何事予と引るゝまゝに庭の方へ参りましたが主人右兵衛
の横死し居るを見出し其より家内中の大騒となり源之丞も急報
にて立歸り養父の無慘の有様に齒がみを致し正しく水右衛門奴
が所業遠くは往くまゝ人々を使し舞坂天龍の口までもと手分し
て探しましたが行衛が知れません切齒扼腕するも今更詮もさく
早速檢使も濟み葬儀も手厚く執行ひましたかくて初七日の法事
も済ましたので源之丞は一通を以て敵討の願を立てましたが下
野守殿より江戸表へ何ひ沙免の沙書附を下され其月の十日即ち
天和二年の十月石井源之丞は家來竹部文太夫當年五十三才なれ
ど強勇なる男并びに補助とて源之丞が明石より召連れたる男廿

一才あるものと此三人を供とし養母に暇乞して濱松を跡にさし
都の方へ志て出立を致しました
かくて石井源之丞は文太夫袖助兩人の供を召連れ都の方へと志
し敵に近江の名もゆかしく膳所は水右衛門の實父の住居なれば
忍び居るべしと江州膳所に逗留致し暫く敵の様子を探りました
が忍び居るべき様子も無いとせんそれより京大坂と經廻り日を
經て生國播州明石へ参りました濱松にてありし事件は未だ報知
も致しませんでしたものでムいすから實父源藏兄の六太夫も
その突然なるのに驚きましたが源之丞の物語天下よりの沙免の
状を見て或は悲み或は怒りア、誠に縁なりしよ亦相續人よ所望
せられて未だ三年も立ゝぬうちかゝる不幸に出會ふとは一日も
速かに養父の仇を討ち取るべしと勵ましましたので源之丞は一

屑承み立ち翌朝早く出立せんと致しませるを急ぐ心はさるとな
がら何所といふ目的もなしせめて今日は先祖への墓参をなし明
後日あたり發足なすとも遅かるまじとの實父の語に三日の間返
留致すこと、相成りましたたがその第二日目は即ち十二月廿三日
にて寒氣も殊に烈しく雪さへ降しきるに夜をも厭はず源之丞は
世を恐ふ身は後めたる頭巾よて面を包み恐妻なるお松の許を訪
ねましたたこのお松と申すは元源藏の草履取なりし作助とい
ふ者の娘でふいますすが不圖また事より源之丞と契りを結び源次
郎半次郎といふ二人の子までを設けた中でふいますすが先年飽か
ぬ別を致し其後は獨空園を守りて貞操正しく只管兩兒の成長を
樂しみ居りました今夜も明日の機織る用意とて糸を繰りおとし
て眠りもやらずして居ります折から戸を叩く音に出て見ます

れば夢の間も忘れぬ源之丞でふいます夢かど斗り嬉しく又悲し
く暫しは身の薄運を歎き成人したる兩兒を見せ又親父の死去せ
しを物語りました源之丞もろなたの歎くも道理さぞや無情もの
と思ふあらんが是には種々次第のある事その内機を見てろなた
も子供等も涙松へ迎ひんと思ひ居まに此度の變事にてかくの仕
合なり名残は盡ねど是にて永別と思ふべしと立歸らんと致しま
すればお松はさして驚きもせず武士たる身はさこそおはすべ
し心の中思ひやられまするわはれ男の身ありせば子供をも致
すべきにあるに甲斐なき女兩兒が十五六にもいはい子供をも致
させんに首尾よく敵を討ち取り玉へ二人の子供の成長をほ慰せ
よ別れの涙はゆるりと跡にて話しやすべし早時移る歩歸り遊ば
せど願ましますので源之丞も其雄々しき心に契まされ聊かあが



之丞に申出でますには斯様に
致し居りましたは雲を掴
み風を捉ふるが如き敵なれ
ば何時廻り逢ふとも極め難
し就ては水右衛門をば尋ね
ず却つて敵に尋ねさせん計
略には彼が親の卜元をば殺
害して互に親の敵あり汝人
間の魂あらば阿部川に尋ね
来よと書面を残すに如かじ
とやしましたたが源之丞はろ
は不仁の業とて承知致しま

ら金子を遣し両兒の養育をたのむと云ひ捨て立ち歸らんとする
にお松は否とよ金子のとあらばは案じあるお母の訓置かれまし
た明石縮の機を織りましても母子三人の暮は立てまする先年の
別れの節おのこし遊ばしたる金子百兩も未だ封の儘に仕舞置き
ました是見給へど手箱の中をか探りて見せました源之丞も殆
く感心あしその貞操を賞でその夜は余り更けたりとて残る物語
もあれば夜と共語り明さんどろの夜はその儘其處に宿り翌朝明
石を發足いたしました
斯くて源之丞主従は諸國を廻りて敵の行衛を種々ど探索すれ
ども更に是といふ手掛もなく出入三年四國九州を廻り終り今は
取つて返し駿州阿部川なる家來文太夫の宅に逗留して空しく月
日を過して居りましたたが文太夫は源之丞の心を思ひやり一日源

せんが兎も角も文太夫に任すべしといふので文太夫は直様江州の膳所へ参り水右衛門の實父ト元を暗殺し兼て企みし書狀を殘して立歸りましたさて是よりは敵を呼び出す策なれば少しも油斷みならずと文太夫はその子金六并袖助と共に片時も側を離れず用心して居りまふたがその年の九月廿三日文太夫の妻の弟にて阿部川より東在中島村の庄屋空兵衛といふもの源之丞を訪れ今日は豊作の祝にて新米の餅に府中の淨瑠璃語りも参り故天氣は悪くいへども宵の中ばかりにても参入來下されと申して参りましたのでそれは多心付ありがたし後刻参上致さんと申しましたので空兵衛は悦んで歸りましたその夕暮にありますと折悪しくも雨が段々降りしきつて参ります文太夫はかゝる日待の席おきには老年は却つて如何とて供せず袖助は新米餅は好物なれど

合惡疾起り居ればと供を辭し金六殿多願みやすと金六一人供と立ちましてさきへ参りますれば種々の馳走酒宴も賑はしく村中打寄しとどて淨瑠璃の後には白挽歌より流行唄までいづ果つべくも見ゆませんが追々夜も更けますので多暇やすと立上れば雨も強し今夜は怖りなされと止めましたが大事の身なりかつは遠くもあらねばと歸りました暗さは暗し雨風烈しく金六の挑燈をのみ方に歩いて参りましたが突然に挑燈を切落され何者と身構ゑると均しく金六は膝口を割付られ撞と倒しにあなやと言間に源之丞も脊を切下げられました重傷あがらも兩人は卑怯ありと起んと致しましが深田の中へ陥りました故事起ちも得ならずして居る中に聲を栗にすた一切四方へハツと逃散しました時に貞享元年九月廿三日源之丞行年廿七才金六廿六才でふいました神

あらぬ身のかくとも知らぬ文太夫袖助は深更にも及び雨さへあ
まり烈しき故帰りの程危からんと松明振立迎ひに参りました
途にて圖らずも兩人の死骸を見出し驚くと一方ならず正しく敵
水右衛門等の爲せる業なるべし何か印やなきやと踏み散らした
る足痕を松明ふつてよく見れば腕首一ツ指四本耳一ツ残りたり
かほごに働きたまふに一人も打ち留めたまはず嗚呼無念なりし
あらん能く能く惨運の盡きなりしよと文太夫袖助の兩人は涙な
がらに骸を負ふて歸りました
かくて檢死も済みまして兩人の死骸は中島村の長徳寺へ葬りま
した是より先文太夫が娘のおまつは何時しかに源之丞と契りを
籠めて居りましたとて源之丞の横死を歎き最早生涯男は持つ
まじとまで獨心を決めて居りましたが源之丞の初七日のことで

いませ文太夫寺参りより歸りますると少し風邪の心地と一間に
籠り居りました暫くして用事ありとて速しく娘を呼び又袖助を
呼び傍身達に言ふとあり先づ何事にも我が言ふ事には背くま
じどの誓言を立てよと申すに是は又改まりたる仰かないか
貴殿の言に背くべきと袖助が答ひにそれは早速大慶至極其元の
氣に入るまじけれと娘おまつをば妻に持て下されと袖助に談じ
又むす先には汝は今より袖助を夫と心得よと申付ました思ひ掛
なき一言に袖助はそは思も寄らず仮にも源之丞様の目掛られ
しおつまごの私の妻と致しては不義無道と相成道理とて辭退致
しおつまも亦源之丞のなき後は他し男には嫁ぐまじと思ひ決め
たる由を怨するに文太夫は我死おねばあらぬ義理あれば我志を
願べきものおしされば我娘を妻とするとも不義とはならず是非

に納得されよと申しますが袖助は合点せず死あねばならぬ義理
とは如何ある仔細ぞと申すに文太夫は上着を脱いで見せました
が已に腹切り白布にて巻付て居りました是はと斗皆々驚き立ち
騒ぎますれば文太夫は怒の聲振立て覺悟して切たる腹は騒いで
助る命であい敵を引出す手段を廻らせしは我所業あれば是死あ
ねばあらぬ理由又娘は親の眼を偷みてあせし徒事にて奥様とい
ふ譯にあらす我亡き後は百助は僅に十四才主君の爲に我志をつ
くべき相談相手あし右の次第なれば娘を妻として給はり兼て承
事源之丞様の隠子二方明石にありと申せば尋ねずして守り育
て修成長の時を待て本望を達し忠義の名を天下に顯すべし我が
魂と附添ふて守護すべしといふを此世の名残と致し果敢なく思
は絶ぬまたし

淵瀬定めなき世の中の理にて播州明石の城主松平日向守殿は様
子ありて貞享元年領地減少下總の古河へ所替に相成りましたの
で家中多くは浪人と相成りましたが石井源藏も其羣に入りました
たなれ迄代々蓄財もムいます爲に下屋敷に引移り何不足なく暮
して居りましたそれは扱置袖助は文太夫の遺言のまゝに播州へ
下り源藏に對面致し源之丞の反討に遇ひたる事を告げ且つ文太
夫の遺言により二孤を守育て、君父の志を達せんと此度下りし
由を話し源之丞が形見の兩刀并血染の衣服を出して見せました
源藏は刀を手に取り眼鏡をかけて能く見切り込み十八ヶ
所刀鏢の如し恥かしからぬ死様あり又文太夫の死は痛むべしと
雖忠胆賞すべし汝の忠義も感心せり何分りの身を自愛して望を
達すべしと申しましたかくて袖助は早速に源之丞の忍妻なるお

四十二 山 龜 仇 討

松を尋ね有し次第を物語り兩人の孤兒を初見參するに流石は源之丞の胤でふいます父の横死を聞きまして小兒ながらに齒齧をなしましたそれより祖父源藏にも對面致し母のお松も舅嫁の盃を赤し歎の中にも歎びの眉を開きましたそこで補助は血に染みたる守袋に敵討修免証書を渡しは兩方に附き添ひ日本六十余州に敵の所在を探し出さんと心掛て居りました此時兄なる源次郎は六歳弟の半次郎は四歳でふいます古人の狂歌に世の中は四尺五寸とありにけり五尺の身骸置き處なしといふとがふいます通天に跨り地に跨る藤田水右衛門は東西南北と馳け廻りて彼方此方に身を潜めて居りましたが貞享元年の夏父卜元を討たれましたので己を付腕ふ敵を拂うと同時に父の仇を討つ道理と駿河なる阿部川へ參り密に源之丞の様子

五十二 山 龜 仇 討

を伺ひ居ります中風雨に乗じて源之丞を暗殺致し直ちに江戸へ出まして仕官を求め貞享三年の秋漸々の事にて勢州龜山の城主板倉周防守重冬の江戸抱の足輕に取立てられました一曲ある水右衛門のとなれば巧言令色を以て人をあざむきまして追々出世致します尤も名を赤堀水之助と改名致して居りましたのでふいます其後數々奇功を立てましたので追々に登庸せられ三百五十石物頭役とまであり遂せましたはまことに仕合よきとでふいました
話を元に返り石井源藏は源之丞が遺兒等を我家に引取り養育を怠らず成長の後には復讐さすべしと思ひ居りますも何をすすも寄る年波のとでふいます朝ありても夕なき仕義とても孫等が十五六才にも達するまでは存生思ひも寄らず何人にか後事を托

すべき伯父に當る六太夫は柔弱にして我遺志を嗣がしむべから
ずと彼是と思案の末思ひ付きましたのは赤穂の城主淺野家の老
臣たる大石内藏助でムいます内藏助は源藏が従弟ある備前の家
中池田玄蕃の次男又養父大石頼母の母は源藏が叔母でムいまし
て最も厚き内縁でムいます内藏助は何人も存存の四十余人の
魁となりて義士の芳名を千歳に残りたる位の人でムいますから
源之丞の兩孤を托せられてより教育に怠りムいせんかくて源
藏は行年七十七才にて元禄七年五月五日に病没りました又袖助
は敵の所在を探らん爲めに痰切飴を渡世として關東より出羽奥
州或は北國筋中國畿内はもとより西國迄も尋ね廻り月日の立つ
を待ち遠しく思ふて居りましたが光陰矢の如く元禄十一年源次
郎は二十才半次郎は十八才と相成り最早何國へ出しても畏るゝ



暗夜の
石井兄弟
を討ち
て敵赤
堀を奔り

となしと思はるゝ時袖助も
参合せましたので大石も大
に悦び方策を與へて江戸へ
出立せしめました石井兄弟
は低頭平身して十四ヶ年の
洪恩を謝して暇を告げそれ
より明石に赴き生立し網町
に名残を惜み伯父六太夫に
對面致しそれより江戸に志
し途中江州膳所を探り濱松
に立寄り阿部川へ参りまし
た此處にて袖助と別れ江戸

に赴き補助は六十六部の扮装にて只一人奥州路へと赴きました
は實に得がたき忠僕でふいます
さても石井兄弟は大石内藏助より授けられたる方略に任せ江戸
に着し内藏助よりの添状を以て京橋具足町松本嘉太夫とやす人
見附の下座見役といふ役を勤むる者の許を頼り神田橋彦門番相
馬殿の雇足輕となりて衆の人に服を配つて居りました足輕共の
交際杯は中々に面白きもので十人寄れば十色なる様々の話を致
します石井兄弟は世に稀なる名を尋ねるも各々自國にて見聞せ
し不思議なる名を話ししましたその中に一人上州宗社といふ所に
富士田光右衛門と言ふ軍學師ありといふを聞き正しく敵に相違
あしと直ちに馳せ行き敵と名乗り掛けましたが全く人違でふい
ますのでその粗忽を謝びましたが光右衛門は小首を傾けまして

先年江戸にて出會しとあり正しく其人あるべし只今にては板倉
周防守の家來とあり當時は彦在所勢州龜山に在る由に傳へ聞け
り而して姓名も赤堀水之助と改め居るよしと懇に教くれました
兄弟は江戸へ立戻り板倉家に住込み實否をたいたさんと心掛居り
ましたが同じ足輕の中に木村松兵衛といふものがふいました之
はかゝる仲間の中には珍しき實貞なる男故兄弟は何方にては家
中の若党に住み込みたし相成るべくば板倉様の彦家中にてと頼
みましたがその年の五月上旬にありましてから松兵衛態々参り
まして兼ての彦頼み故成るべくば板倉様の彦家中にて多羅尾隼
人殿とやす物頭にて若党一人召抱へたき由給金は三兩なるが當
年は彦國年故彦供して來年まで龜山へ行ねばならぬが如何じや
どの話に兄弟は打喜び周施を宜しく頼み弟半次郎参ることに定

め名をば岩淵千太郎と改めました源次郎は半次郎に別れ是よりは奥州路へ下り袖助を見出すと致しましたかくて半次郎の千太郎は隼人の供を致し龜山へ下りました八月十五日彦着城の彦祝義とて互に見舞れます千太郎は取次の役を致して居ながらもしや赤堀水之助といふものは待ち構へて居りますと其翌九月九日に物中どの案内に玄關へ出て見ますれば半白の惣髪に黒柿の上下に朱箱の大小を横たへたる威丈高なる侍面づくつて拙者は赤堀水之助とすすもの引籠り居しりため彦見舞延引致したよろしくす上くれよとすます千太郎扱ては此奴こそ我敵なれと顔振り上げて熱々見れば向ふ疵三ヶ所あり要こそあれと心に賭きそしらぬ顔して居りましたそれより袖助より受取置きたる繪像と照し合すに紛ふ方なしさてこそと早速に書面を阿部川な

る百助の許へ送り袖助を尋ね兄を誘へ来る様にとす遣はしましたさても源次郎は袖助の行術を尋ねんとさして行向も白雲の棚引く山越ぬ野を過り奥州南部をも廻り終りましたも出遇せんでさすや半次郎も待ち遠からん是れより龜山へ赴き運を天に任せんと立歸りあがらも眼を配り相州の酒匂川まで参りますと文太夫が末子百助にはたと行合ひました袖助を尋ねても見當らず龜山へ急ぐ所と語りまして百助には何方へ行くやと問ひ升ると先達半次郎様よりの彦手紙有之ぬが只今は敵も確に知れぬよし大慶にいついては兄袖助の歸國を待つ處先日奥州よりの伊勢参り尋ね参り兄上袖助殿野州鍋掛河原に非人どかり居り我を見掛けて彦情に此書状を届けくれよと願まれ参りしとて一通を届

けましたので早速披見せしに去九年上旬よりさんく煩ひ其上
盗難に遇ひ扱さく非人となり鍋掛河原にあれど兄弟の事覺束
あし早々路銀を用意して迎ひに来るべしと申越しました故只今
罷り下りひどころと話しますので源次郎は涙を流し不憫や袖助
定めし艱難をしつらん神ならぬ身の悲しさは鍋掛越堀邊は幾度
も通りしが非人小屋には氣付ざりし急ぎ迎ひ来るべしと小判五
枚を渡し我は龜山にて待つべしと百助と袂を分ちましたそれよ
り百助は路を急ぎまして野州鍋掛に到着致し橋詰の蔭かぶりに
一錢を興へ押越く顔を見ますれば尋ぬる兄の袖助でふいます百
助が兄上かと手を取り交し一別以來の物語を致し敵討の手掛つ
きしとを話ししましたから袖助は嬉しや嬉しや我れ命ありし甲斐
あれ此上は一刻も早く急がんと兩人夫より建立まして故郷に歸

り老母や妻にも面會致し直様龜山へと立越ぬました是より先源
次郎は百助と別れて程あく龜山に到着致し弟の半次郎に面會し
仇討の手筈を示し合せ袖助が来るまで何方にか身を潜めんと途
に家中里見源左衛門か若党に住込み名を岩淵萬五郎と改めまし
た半次郎の千太郎は及川刑部の若党に住替袖助を待つて居りま
した程あく袖助も参りましたので關の地蔵へ赴き龜屋といふ
料理店の奥坐敷を借りまして仇討の相談を開きました藤田水右
衛門は當時赤堀水之助と變名なし居るとは相違なきも我々の目
には見届けられぬ無銘の道具なれば袖助といふ本阿彌の目利な
らでは判ち難しと今更で待ち居れり然るところ近頃水右衛門は
病氣にて出仕を止め居れば討取る機會なくさてく何かと本望
を達する邪魔なりけり此上は詮方なし赤堀か家來等と悪意にあ

し日々様子を聞き外出の沙汰ある時を待つて事を圖らんと相談
一決致しましたたそれより袖助百助等は稻荷町に逗留して様子を
待ち居りましたたがいつかき機會あく空しく待つこと五十四五日
に及びました源次郎は袖助をして水右衛門の骨相を見届けしめ
ん爲よ自分の長屋の脇の物置の板敷を放し毎夜穴を掘りい
ざといふ時忍ばせる所と致し置きましたかくて五月十三日と相
成り来る廿三日には殿様参勤として江戸表へ下り故出勤す
るとの話聞きまして嬉しや時こそ來れと急ぎ稻荷町なる袖助
へ知らせ其日の夕暮より例の物置へ忍ばせまして日々人目を忍
び食事の調ひ握飯團子餅の類を運び兩便の取捨まで亡父の仇を
討つ爲とは申しながら下人の兩便までも取り扱ひましたは古今
稀あると申すすどかくえて水右衛門の來るを待つ中に或日

のと里見源左衛門の玄關へ病氣中見舞を受けし禮にとて参りま
した源次郎は飛んで行き袖助に知らずれば袖助は板の節穴より
之を窺ふに相違はなき様なれど老年に及びたれば今一度確めた
しと心を配りましたは實に得かたき主従で申しました
夫れ水は人生飲くべからざる物で申します時としては洪水と
ありて人を害するとが申します又水は鏡の如く水晶の如く清ら
かなるものあれども塵芥泥砂の爲めにろの性質を失ふて濁れる
水となる人も亦生れながらにして姦惡あるものなく皆利慾の爲
にその質を損するで申します扱も赤堀水之助は一日同家中にて
鉄砲組物頭を勤むる小栗小太郎といふ日常惡意なる者の宅に訪
れまして膝を摺り寄せまして涙を流して申すには今夜貴殿
へ伺候せしは折入て御願申す置くことありてなり拙者は御家中に



源之丞の遺孤等我を狙ふ
 と思はれましが近頃不
 圖も里見源左衛門殿方
 て若党の萬五郎とやすも
 の先年駿河に於て反討せ
 し源之丞に生寫彼必ず我
 を狙ふ遺孤と見請ました
 此赤堀は近き日に渠等が
 爲に打れいべし妻あれど
 も實子なく養女一人不便
 にい水之助相果て後思召
 當る事あるべしとし候

親類どもなく貴公一人を親兄弟とも思ひ居り傍懸意願上居れば明日にも相果る共骨をも拾ひ下さるべき貴公あれば一言上置くとあり最早我一命は當月限と成れりといふに小栗は眉に皺よせ是は又改りたる異あを承まはるとやしますると水之助は今透一に身の來歴を傍話すべしと石井源之丞の親を殺害せしとより實父ト元を討たれしと又源之丞を反り討ちせしとそれに就き源之丞の遺孤二人あれば我を敵と付視ふべしと名を今の赤堀水之助と變じ傍當家に勤めかく安隱に暮すところゝに十六ヶ年然るに去年七月廿七日の夜の夢二十才ばかりの男二人我は曾我の神靈なり親の仇遁すまじと呼はる聲虚空に響き左右より切て懸りし故物々しやと渡り合しが忽ち一人白蛇とありて拙者の五体にからみ動くを叶はず遂に止めをさゝれて夢さめたり是必らず

とどやされました小栗小太郎は大に驚き貴殿先非を懺悔の由物
語今更止めずも詮なきと浮心任になさるべし跡々のと浮氣
づかひあるべからず右の浮心中を敵の者ども承知いたさば中々
乃の立處あらぬ様に感ずるなるべし天晴なる無双の勇士浮暇乞
の盃受けんと酒汲交しました水之助は歸宅致しました寔に人は
その性善なりとややすべきか
扱ても龜山の城主板倉侯には五月廿四日浮發駕にて江府へ浮參
勤あるにより前夜より城内はもとより家中城下の賑ひ一方では
ムいません萬五郎が主人ある里見源左衛門は參勤の浮供でもム
いませんと故別に用事もムいません折柄間密者原田元益參り
合せましたので是幸ひと碁局を取り出し烏鷲の戦を始めました
が只一戦に元益打負け頭をかき是は意外の敗軍流石の老將も降

とと笑ひますれば源左衛門も打笑ひ時に老將につき彼の水
之助殿は江戸にて度々乱暴者を手捕にせられたと聞き及びまし
たが成る程さるともあつたでムいませうか今や早老將なれど中
々氣丈の人でムいませう久しく病氣に引籠り此節少しは快き様な
がら未だ疲勞の体なるに明日は石薬師まで見送りを勤むるよ
し近頃大儀のどと談話をするを聞きました萬五郎是れ幸福と何
か獨點頭ました夜の明くるを晩しと待ち構へました萬五郎は
早々水之助方へ參り主人源左衛門は浮見送り浮出相成り節
門前浮通り節浮扣へ下され度し浮同道致したしといふに水之
助方には浮口上の趣承知せりとのとでムいませう萬五郎は大に悦
び歸り袖助に通じ置きましてその日浮見送りの爲出掛參り源左
衛門方の門前に立寄りし時篤に骨相を見せしめましたが確に相

逃なしとのとでムいませして此に於ていよ／＼仇討の打合せを
あさんど又々關の地蔵の茶屋に袖助百助等を集會せしめ四人隊
組合せて瀬りと仇討の計略を談しました
五十三驛の一驛たる伊勢國龜山城下の百間馬場の喰違の土手の
松の木を小楯と取り眼を四方に配りて居りませする四人のものは
これさん石井兄弟袖助百助でムいませ兄弟の着服には下に白帷
子上には丸に井の字の定紋付たる淺黄帷子を着し萌黄の袴の股
立を取り袖助百助の兩人は紺の麻看板に長脇差を帯して居りま
すかゝる所へ赤堀水之助は病後の初當番のとどて相番に斷り早
引を致しやがて此處へ差掛りませした其有様を見ませするに黒羽二
重の袷に芭蕉布の袴萌黄縮緬の一重羽織に朱袴の大小にて若党
常右衛門草履取波平の兩人を召連やふやく下馬前まで參りませす

ると四人一度に現れ出で袖助は正面に立而ひア珍しや藤田水
右衛門かくいふは故の石井源之丞が家來袖助なりと呼はりませ
れば赤堀は一足飛びしさつて藤田水右衛門と見たりしや我も兼
ての覺悟なりと言も果てぬに石井兄弟聲をかけ石井源之丞が二
人の悴源次郎半次郎なり親の仇討さしと左右より切て掛れば心
得たりと二刀スラリと引抜き右と左に相手となし此處を先途と
戦ひませしたか赤堀今は叶はじとや思ひませしたか尻居にせつと据
りませした兄弟付入り首尾よく仇を討取り兩人の家來も一刀づゝ
恨みませして今は本望達したりいさ急がんと四人手に手を取組ん
で刺違へんと致しませしたか何方よりか首尾はよし早々通よどあ
りませしたので四方を見るも人影なしさては會我神靈の傳告なる
べし忝かしと一通の遺書を遺して惣門の外へと立去りませしたか

龜 山 仇 討 終

討の局を結すは石井兄弟も袖助兄弟も益々然る孝子義臣の名を
世々に傳ひました

くて人々その死骸を見出し上を下へと騒ぎましたが小栗小太郎
馳せ付是は敵討に赤堀水之助奪て話し置きたるといふそれは斯
様くど赤堀が懺悔の次第を述べまして事静まりましたる程に
石井兄弟は道を急ぎ六月二日遠州濱松へ着し仇の誓を右兵衛の
墓所に手向け又駿州阿部川へ参り源之丞および竹部父子が墓所
に回向をなし程あく江戸へ達し評定所へ推参し委細に訴へ父
に賜りたる敵討免の証書を出しましたかくて評定所に於ては
逐一に取調べられ全く訴ふる所に相違なければ故なく相済み舊
主青山下野守殿御目得仰せ付られ石井源之丞が家督たるべき旨
申渡され兄弟のものへ新地五百石づゝ又屋敷を賜りたまたので
源次郎は母を迎へ袖助兄弟へは知行の内百石を興へ恩人大石内
藏之助が山科の宅を訪ひ積年の恩義を謝しましたこゝに龜山仇

明治三十五年六月三日印刷
明治三十五年六月十日發行

不許複製

編輯者

服部喜太郎
東京市京橋區本材木町三丁目廿番地

印刷者

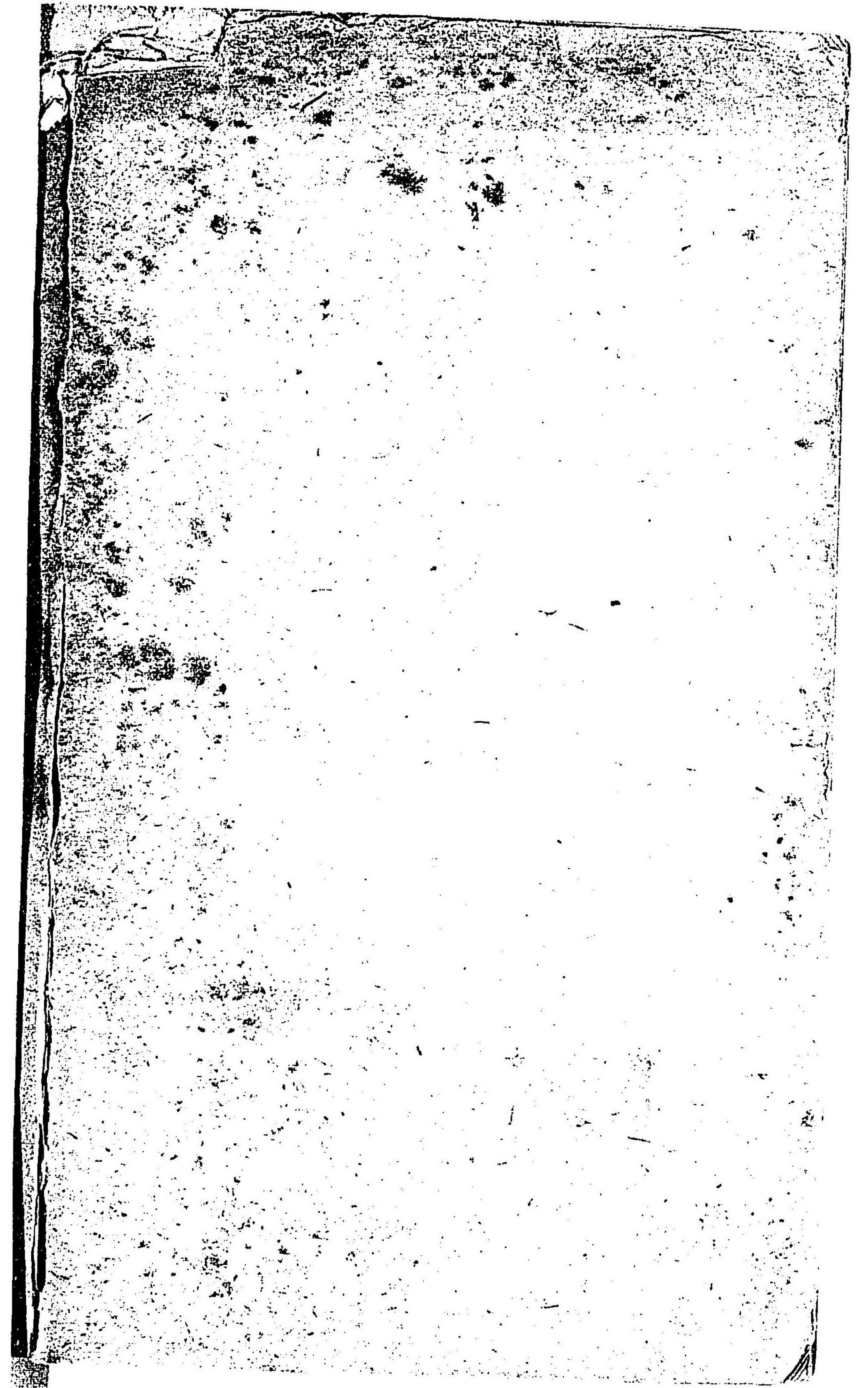
大場沃美
東京市神田區南乘物町十五番地

印刷所

龍雲堂
東京市神田區南乘物町十五番地

發行所

求光閣書店
東京市京橋區本材木町三丁目廿番地





097701-000-8

特11-794

宮本灘嶋仇討

桃流舎 至孝/口演

M35

DBS-1636

